

頭にインプットされた情報の中から、急に意識の表面に浮上するキーワードがある。それはおそらく何かを考えた時に、その事柄を発展させるために参照できる頭の引き出しに保存された「事実・感情メモ」なのだ。

ある時オペラ関係の写真を眺めて眠りに就いたら、先日読んだ新聞記事の中にあつた井上ひさしさんの「ひょうたん島」というキーワードが繰り返し浮かび上がった。浮かび上がったということは何らかの意味がある。そこで歌詞を改めて調べてみると作詞：井上ひさし・山元譲久、作曲：宇野誠一郎とある。物語の原作者の作詞である。正確な文字表記はわからないが「波をチャプチャプチャプチャプかき分けて、雲をスイスイスイスイ追い抜いて、ひょうたん島はどこへ行く、僕らに乗せてどこへ行く、丸い地球の水平線に、何かがかきと待っている、苦しいこともあるだろさ、悲しいこともあるだろさ、だけど僕らはくじけない、泣くのはイヤだ、笑っちゃおう。進め、ひょっこりひょうたん島」という内容である。物語は遠足に行った島で火山の噴火が起き、先生と子供たちを乗せたまま島が海上を漂流していくという NHK の人形劇である。「子供たちの冒険物語」とあるが、私の感覚を手招きした何かはもっと深い所にある。それは困難に挫けずに立ち向かう元気な子供たちの単なる冒険談ではなく、苦しみ・悲しみを乗り越えて生き抜く子供と、発展途上の大人たちにも当てはまる人生の戦いそのもののような気がする。それはおそらく井上ひさしさんの人生の経緯を知った影響が多分にある。正直、私は井上さんの著述を読んだことがなく、時折新聞に載る特徴的な出っ歯のイラストの印象しかなかった。しかしその人生の経緯を垣間見たあとでは、井上さんと交流のあった先生の「人を笑わす人は寂しい人ですよ」という一言の重みが心に響く。井上さんは文字通り苦しみを笑いに転換したといえるだろう。嘲笑ではない笑いで救われる感情は少なくない。考えるよりも美しい。

さて、先の歌詞から受ける印象をまとめてみると「世間から切り離された状況の中で、あらゆる波をかき分け、見上げる高みを追い抜いて進んで行く。僕の人生はどこへ行くのだろう。水平線の向こうは見えないけれど、希望の何かがかきと待っている。苦しいことも悲しいこともあるけれど、挫けないぞ。泣いて生きるのはイヤだ、苦しみや悲しみを笑いに変えて乗り越えよう。進め！僕の人生」

当たり前のように生活している中で、流されるままに生活していく中で、あるいは逆境に抗し乗り越えながら進む中で「人間として自分の人生を生き抜く」とはどういうことだろう。国が違う、都市が違う、一人ひとり環境が違う。苦しみや悲しみの果てに冷徹になる人間がいる、優しく温かくなる人間がいる。欲が深くなる人間がいる、欲から解き放たれる人間がいる。その中で苦しみから抜けられなくて罪を犯す人間がいる。けれど笑いはその弱さを乗り越えて正しく生きようとする抵抗の中から生まれる。その強さはどこからくるのだろう。元々人間は弱いもので、初めから強い人がいる訳ではない。一見「強い」人は不自由のない生活背景に補強されている。真の強さは生物としての「本能」の中にあり、それを進める原動力は「学び」にある。それが人生の本道をそれないように軌道修正できるホモ・サピエンスの特徴だろう。

人生とはバランスである。苦しみ・悲しみの重りを乗せた秤の片側の皿には楽しみ・喜びの重りを乗せて均衡を保たなければならない。そのために、笑う。（2013.5.25）